スポーツ倫理学の研究方法論に関する研究[†]

友 添 秀 則"
近 藤 良 享""

論文構成

1. はじめに
2. スポーツ倫理の研究動向
 - 2.1 人格陶冶機能の研究と規範的研究
 - 2.2 規範問題への関心の増大
3. スポーツ倫理の研究方法論上の問題点
 - 3.1 方法論の不備・不足に伴う結論の不確定性
 - 3.2 一般倫理学における方法論上の論争
4. スポーツ倫理学の研究方法論
 - 4.1 一般倫理学から示唆される研究方法論
 - 4.2 マッキントッシュの方法論とその問題点
 - 4.3 フレイリーの方法論とその問題点
5. まとめと今後の課題

1. はじめに

近年、スポーツは、教育、文化、政治、経済、マス・メディア等と密接な関わりを持つようになって、私たちの生活領域の中でますます重要な役割を演じるようになってきている。それに呼応するかのように、スポーツにおける倫理的問題状況は、量的、質的に大きく変貌している。歴史的に見れば、本来、非日常生活空間で行われてきたスポーツが、日常生活の中に引き戻されつつある現在、様々な問題が噴出している。例えば、発覚の如何を問わずルール違反を行い有利に試合を展開しようとする行為の問題、ほとんど試合とは無関係に暴動を起こす

フーリガンの問題¹⁾、また、スポーツの外在的目的の達成のために、科学技術を駆使して行なわれる各種ドーピング（薬物ドーピング²⁾、血液ドーピング、中絶ドーピング³⁾）の問題に見られるように、スポーツにおける倫理的問題状況は、競技場内・競技場外を問わず、これまで存在した問題と並んで、新しい価値判断基準を要請する問題を生じさせている。

これらの問題状況に伴って、スポーツ倫理の研究は本格化したと言える。その中心的役割を演じたのが、1972年設立の国際スポーツ哲学会（The Philosophic Society for the Study of Sport, 略称PSSS）であり、その研究成果は、その機関誌（The Journal of the Philosophy of Sport 略称JPS）を通じて公表されている。しかし、現状分析の結果を先取りして述べれば、モルガン（W. Morgan）やマイヤー（K. Meier）⁴⁾が指摘するように、スポーツ哲学という研究領域自体の歴史が浅いこと、とりわけスポーツ倫理の研究は、眼前の問題状況に対症的に提言するという各論が目立ち、明確な倫理学の方法論に依拠した理論構築というよりも、むしろ一般倫理学の成果を意識している程度と言える。そして、この傾向は、1970年代以降のスポーツ倫理研究が本格化してくる中であっても、JPSのみならず、Quest等の他の体育・スポーツ専門誌の諸論文にも共通している。確かに、この傾向がスポーツ哲学研究の後発性や一般倫理学そのものに内在する論争状況⁵⁾に起因する理由から生じたにせよ、最近の諸研究にあっても、その一部を除き、同じように対症的提言が先行し、明確な方法論上の根拠を欠いた研究が見受けられる。

しかしながら、スポーツ倫理の研究は、ス

[†] A study of methodology of sport ethics, by Hidenori TOMOZOE (Kagawa University) and Yoshitaka KONDO (University of Tsukuba).

†† 香川大学

††† 筑波大学

スポーツ行為の善・悪、公正・不正を直接に扱う領域である以上、ある行為に対する倫理的判断の原則や根拠が設定されなかったり、主観的、恣意的判断によって一定の見解が提出され続けられれば、それらの研究成果の論理的妥当性は脆弱であるし、延いては、明確な方法論⁶⁾を備えた「学」としてのスポーツ倫理学体系は、確立されないと考えられる。

本稿では、以上のような問題意識に立ち、スポーツを倫理的もしくは倫理的に扱った研究の動向を概観し、一般倫理学の方法論論争の状況を踏まえながら、スポーツ倫理学における研究方法論についての検討を目的とする。

具体的手順としては、まず、1970年代以降のスポーツ倫理研究を整理して、その動向を探ると共に、どこに研究上の問題点があったのかを明確にする。そして、スポーツ倫理学の親学である一般倫理学の状況、特に方法論に焦点を当て、一般倫理学の状況を参考に、明確な研究方法論を具備したスポーツ倫理学的研究を検討していくことにする。

このような目的で行われた先行研究は、渉猟した限りでは見られなかったが、本論文のスポーツ倫理学の方法論を検討する際の前段階である研究動向については、馬場⁷⁾、クレッチマー (S. Krechmar)⁸⁾、マイヤー⁹⁾らの研究が挙げられる。

馬場の論文は、「スポーツ倫理の倫理学的研究」を概観して今後の研究課題を引き出すことが目的とされ、1970年代までの研究を記述的倫理学、規範倫理学、メタ倫理学という一般倫理学の方法論別に分類し、メタ倫理学的研究が今後進められていくと結論づけている。この結論についての妥当性は別にして、スポーツ倫理の研究が倫理学的方法論を適用する傾向があるという指摘は、本研究の動機となる視点を提供している。しかし、この論文では分析対象を1970年代までの論文としているので、それ以降の動向については検討すべきであり、本研究はこの課題を担っていると考えられる。

クレッチマーは、スポーツを倫理的観点から検討する際に、スポーツにおける競争倫理についての記述的、形而上学的理解が不足しているために倫理学一般の問題に還元されてしまい、スポーツ倫理学独自の研究としての色彩が薄れていると述べ、また、道德外の価値 (nonmoral value)¹⁰⁾ についての分析が不十分なため、達成すべき善や回避すべき悪・害が描けないとも指摘する。この研究からは、スポーツ概念の明確化の重要性が示唆されるが、本研究の直接の関心事ではないし、後者の道德外の価値問題の指摘からは、後述する一般倫理学における方法論上の論争問題とも関わるため、他稿で論じることが適切と判断される。

さらに、マイヤーの論文では、価値論とスポーツに関する諸論文が概観されている。ここでは、1984年の国際スポーツ哲学学会大会と同年のオリンピック科学会議での発表論文が主に分析されている。しかし、分析といっても紹介程度で内容を深く検討するまでには至っていない。

以上の簡単な研究動向についての先行研究の分析から、本論文の基本的視座、つまり、方法論に着目したものは見当たらない。比較的類似している馬場の研究も分析対象が1970年代以前であり、その意味から本研究で主として扱う1970年代以降の検討は、意義あるものと言える。また、一般倫理学における方法論への着目は、今後のスポーツ倫理学研究への重要な手掛りや課題が見い出される可能性もある。以上の諸点から、本研究の意義が認められると言えよう。

2. スポーツ倫理の研究動向

この項では、従来のスポーツ倫理の研究動向を社会情勢と絡めて論述する。

2.1 人格陶冶機能の研究と規範的研究

スポーツの倫理学的研究が本格化してくる

1970年代以降の研究は、その主題によって主に2つに大別できる。1つは、スポーツが人格陶冶の機能を有するか否かという主題に代表される研究であり、もう1つは、現実のスポーツの倫理的逸脱状況に対しての提言を含んだ規範的研究である。

前者の人格陶冶機能の研究には賛否両論がある。従前からの「スポーツは倫理的価値を促進する」という肯定的見解¹¹⁾がある反面、スポーツは望ましい人格形成に寄与するよりもむしろ「勝利追求がスポーツマンシップやフェアプレイ精神を墮落させる」という否定的見解¹²⁾もあり、それらの見解は今なお論争中である。肯定的見解では、公正、正義、不屈の精神、謙虚さ、等々の美德が育まれる、見方を代えれば、育んで欲しいという願いが込められて主張される場合が多く、批判的検討を敢えて避け、前提として容認してきたとも解される。一方、否定的見解の理由としては、選手、監督のみならず観客までもスポーツを巡って残忍性や凶暴性を発露すること、暴力がスポーツの構造の一部分であり、それらが社会の一般的な倫理を反映していること¹³⁾を挙げている。この賛否論争は、主としてスポーツ史の研究成果等を前提にして、その問題の性質上、スポーツ社会学やスポーツ心理学の領域において扱われている¹⁴⁾。しかしその一方で、この賛否論争とは別の第三の立場ともいえるべき見解が出されている。それは、ロック (L. Locke)¹⁵⁾に代表される「スポーツの無価値論」と言える見解である。それによれば、スポーツが特定の目的に奉仕する必要はなく、とりわけ道徳的に人間を涵養させたり教訓的である必要など全くないと述べられ、スポーツ倫理の研究自体もあまり価値のない無用のものと捉えられている。

このように、スポーツにおける人格陶冶の機能をめぐる論争は、賛否論のみならず、命題そのものへの懐疑論もあり、論議が錯綜して結論に到達しているとは言い難い状況である。

他方、後者の規範的研究では、スポーツにお

ける倫理的逸脱現象を眼前にして、それらをどのように倫理的に評価を下すのが主題となっている。当然、この種の研究の性格上、スポーツ哲学の領域において扱われている。そこでの主な関心領域には、以下のようなものが挙げられる。

- ①スポーツにおける暴力の問題
- ②アスレティズム (athleticism) の問題
- ③競技力向上のための各種ドーピングの問題
- ④大学スポーツの問題
- ⑤スポーツにおける機会均等の問題
- ⑥スポーツにおける男女平等の問題

これらの関心領域は相互に関連しているとは言え、具体的論点に踏み込むと、現状でのスポーツの抱える倫理的逸脱状況が露呈することになる。

①の問題は多岐にわたり、フーリガニズムの問題、フットボール、ボクシング、アイスホッケー等の身体的接触を伴うスポーツ種目の倫理的評価の問題、試合中に意図的に対戦相手にけがを負わせる行為の問題まで含まれる。さらに、人間対動物、動物対動物の見せ物的活動への倫理的疑義もある。これらの問題に対しては、父権的保護主義 (paternalism) や害悪回避原則 (harm principle) を適用して論が展開されている。

②は、スポーツの本質特性である「競争」に関連した倫理的問題が主に扱われる。そこには、勝利への歪んだ固執、ルールの悪用やルールの拡大解釈、例えば、試合時間の引き伸ばし、偽りのけが等の問題が含まれる。このような問題に対しては、「スポーツの本質」をどのように理解すべきかが議論の中心となる。

③は、主に薬物ドーピングの問題である。ここでは、一定の倫理的原則の設定を自由論や公正論を援用することによって、各種ドーピングの倫理的評価を下したり、それらと並んで、規定の設定理由である選手間の不平等性への疑い

が議論されている。

④は、大学スポーツの商品化の問題にその焦点が当てられている。選手の不正入学、不正な競技奨学金 (athletic scholarship) の支給、学業不振の隠蔽、勧誘のための裏金問題が論じられている。

⑤は、スポーツにおける権利 (人権) 問題にその焦点が当てられ、レギュラー選手と非レギュラー選手の権利問題や黒人選手の人権問題が扱われている。

⑥は、周知のように、スポーツにおける男女差別の撤廃を標榜したタイトルIX (1972年) 制定が契機となっている。それまで男性中心の身体接触スポーツに女性が参加することや、スポーツにおける性差別撤廃の問題が扱われている。

これらの関心領域は、まさに、スポーツにおける行為の主体としての人間の当為に直接関わる問題であるだけに、その規範的研究の色彩を一層強めていると考えられる。

2.2 規範問題への関心の増大

1970年代以降の倫理学理論に依拠したスポーツ倫理学的研究は、一方では、スポーツの倫理的逸脱現象の急増とともに、他方では、それにもまして米国社会の1960年代の特殊な社会背景の影響を受けて着手されたと考えられる。1960年代の米国社会は、膠着状態のベトナム戦争に対する反戦運動の盛り上がり、アラブ移民によるケネディ大統領の殺害、キング牧師の暗殺を契機とした黒人暴動、メキシコ・オリンピックでの黒人選手による人種差別状況の告発、全米に広がる学生運動、その後に続くウォーターゲート事件に代表される一連の政治不信、そしてヒッピー、フリー・セックス、マリファナがファッションの一部となっていく¹⁸⁾。

このような1960年代の社会情勢の不安定さは、当然、人々に倫理的研究の必要性を痛感させるようになる。それは、1970年代になってから、一連の倫理に関する書物や読み物が、かつ

てないほどの公刊ラッシュを迎えたり¹⁷⁾、ニューヨーク・タイムズが指摘するように¹⁸⁾、多くの学生が倫理学の授業に異常なまでの興味を示し、受講者数が急増した事実はそれを物語っている。このような時代の実際要求のなかで、倫理学自体も1930年以降主流であった分析哲学を基盤としたメタ倫理学から、その成果を吸収しつつ、規範倫理学へとその学的対象が移ることになる¹⁹⁾。しかし、このような米国の社会情勢からの規範的研究の要請とは別に、他方では、ほぼ同時期に出現してくる従来までと様相を異にしたスポーツにおける倫理的逸脱状況は、1970年代の中頃から、1つの社会問題として米国国内に論議を巻き起こしていくのである²⁰⁾。

このような状況下で、スポーツの倫理学的研究は、暫時本格化してきたと考えられる。しかしながら、スポーツの倫理的問題状況に対して倫理学体系に依拠した包括的な研究がなされるには、スポーツ哲学・倫理学の歴史が浅いことに加えて、スポーツ倫理学の「学」としての意識が希薄なため、それが結果的に方法論的不備・不足につながり、残念ながら、主観的な提言の域を出るものではなかったと言える。このような傾向はその後も反映し、倫理学の義務論・自由論・正義論・公正論を恣意的に援用した研究が、1970年代以降においても少なからず見られることになる。これらの諸点について、以下で詳しく論述する。

3. スポーツ倫理の研究方法論上の問題点

前項で指摘したように、スポーツの倫理的研究には、倫理的原則を導出する際の方法論に不備・不足があり、これは、主にスポーツの倫理学的研究の歴史的未熟性にその一因があった。

ここでは、スポーツ倫理学的研究の方法論上の問題をさらに詳しく検討していく前に、あらかじめ、方法論の不備・不足について、具体的に明らかにしておくことが問題の明確化に寄与す

るであろう。

3.1 方法论の不備・不足に伴う結論の不確定性

スポーツにおける倫理的問題状況とそれらに対する見解は様々である。例えば、薬物ドーピングについての見解を先行研究の中から拾い上げれば、次のものがある。

◎薬物ドーピングについての見解

薬物ドーピング禁止の賛成意見

○薬物使用は、有害な副作用という点から望ましくない。

○薬物使用によって競技力を向上させることは、スポーツの原理である機会の平等と公平の原則の侵害であり禁止されるべきである。

○薬物使用は、教育的重要性を含むべきスポーツ活動にあって、容認することができないものである²¹⁾。

薬物ドーピング禁止規定への疑義

○薬物使用は、ダイエットや他の日常的トレーニングと同様のものである²²⁾。

○薬物使用によって効果を上げるためには、かなりのハードトレーニングを必要とするので、それによって生じる結果は競技者の努力の成果であり、承認される必要がある。

○薬物使用は、高度に洗練されたシューズの使用や棒高跳びのポールの使用と同列であり、一概に禁止されるべきであろうか²³⁾。

○薬物使用の禁止は、競技者の自己決定や責任の基本原則から、個人の選択権の侵害である^{24, 25)}。

以上のような薬物ドーピングに対する賛成・疑義の見解は、あくまでその一部であり、他にも幾多の見解が提出できるであろう。しかし、スポーツにおけるある行為の適法性を判定する際には、ある倫理的原則を基準として見解が述

べられるべきである。換言すれば、それらの見解は、ある倫理的理由を伴った倫理的陳述（判断）を意味するものでなければならないであろう。1970年代以降とそれ以前のスポーツの倫理（学）的研究を隔てる差異は、上述した意味での一定の倫理的原則に則った倫理的陳述（判断）が提出されているか否かにある。しかし、1970年代以降の研究にあっても、別の新たな問題が生じる。上述の薬物ドーピングの例を借りて言えば、次のようになる。

薬物ドーピング問題に対して考えられる原則、例えば、医学的原則・平等原則・教育的原則・自由選択原則のうち、単数、複数を問わず、どの原則を適用するのか。また、複数を適用する場合、原則間の優先性（priority）によって、倫理的陳述（判断）内容や倫理的評価が変わる可能性がある。具体的に言えば、複数の該当原則のうち、医学的原則²⁶⁾を最優先して薬物ドーピングに倫理的評価を下す場合、仮に副作用のない薬物であればその使用を否定する理由はなくなくなり、禁止薬物以外はその使用が自由ということになる。その上、別の原則、つまり、「最高のパフォーマンスの追求」という原則を最優先すれば、薬物ドーピング禁止規定の是非が逆転する可能性も生じる。

確かに1970年代以降の研究のほとんどは、一定の倫理的原則に則った陳述（判断）が提出されている。しかし、原則間の優先性の問題、換言すれば、ある倫理的評価を下す際にどの原則を優先するかについての吟味と検証が不備の場合が多く、さらに、原則の優先性が言及されている場合でも、適用されるべき倫理的原則²⁷⁾自体の倫理学的正当性の吟味と検証が不足している。このような現状、つまり、原則間の優先性の吟味や検証の不備、不足が、スポーツの倫理学的研究の問題（方法论の不備・不足）と言えるものであり、筆者らが特に強調したい点である。サイモン（R. Simon）が「現代スポーツの倫理的問題状況が、必然的にスポーツに対する一定の倫理的評価基準を要請する」²⁸⁾と指摘す

るように、少なくとも方法論的に不備、不足があるという問題意識の上に立つことは、スポーツの倫理学的研究を進める際に欠かせないと言えるであろう。

ここまでの方法論的不備、不足に関する考察を約言すれば、次のように言えよう。つまり、スポーツにおいてどのような行為が許され（何が正しい行為であり）、許されないのか（何が不正な行為なのか）、そして行為の適法性を判定する基盤となる倫理的原則が何であり、またその原則がどのような倫理学理論によって、どのように倫理的正当性が保証されるのかということになる。

3.2 一般倫理学における方法論上の論争

上記で試みた考察は、今まで留保してきた一般倫理学における方法論の論争へと我々の関心を導くことになる。次にそれらについて簡潔に触れることにする²⁹⁾。

英米の倫理学においては、ある行為に適用すべき原則を確定する方法論は、多種多様であるが、見方を変えれば、ある行為に対する倫理的判断を同一の原理によって説明するためには、どのような倫理的原則を採るべきかの論争とも言える。この行為の倫理的原則をめぐる方法論上の論争は、行為における善悪、正邪をどのように把握するかによって、その立場を異にする。現在、それらの方法論は大別すると、次の4つが考えられる³⁰⁾。

①義務論 (deontology) 的見解

倫理的原則が具体的な行為の結果と独立に、ア・プリオリに普遍妥当性をもって決定され、善なる行為を行うことが義務と考える立場^{31), 32)}。

例：カント (I. Kant) の義務論 (定言命法)・直覚主義

②文化的相対主義 (cultural relativism) 的見解

倫理的原則は歴史的相対的なものであり、

それは記述的・経験的探求によって決定されると考える立場³³⁾。

例：相対主義

③目的論 (teleology) 的見解

倫理的原則が具体的な行為の結果によりア・ポストオリに基礎づけられ、快樂、幸福等の倫理的価値以外の価値をどのように実現するかによって決定されると考える立場^{34), 35)}。

例：功利主義・プラグマティズム

④メタ倫理学 (metaethics) 的見解

倫理学の直接の目的は、善、正、義務等の倫理的命題に解答を与えながら倫理的原則を確定することではなく、単に言語分析によって、倫理的用語の意味と相互関係を探求する意味論であるとする立場³⁶⁾。

例：情緒主義・日常言語学派

一般倫理学における方法論上の諸論は、歴史的には、倫理的原則がア・プリオリに確定されとする義務論と、それがあくまでもア・ポストオリにしか確定されないとする目的論の論争があり、その1つの打開策としてメタ倫理学的見解が登場する。メタ倫理学は、1930年代以降の分析哲学の研究動向に大きく刺激された、論理実証主義 (logical positivism) を背景にしている。義務論、目的論とも倫理的原則を設定する基本的立場は全く異なるのであるが、両者とも共通に倫理的原則を設定するための倫理的判断が、少なくとも何らかの意味で客観性を保持し、認識として成立する (認識説, cognitivism) と考えるのに対し、メタ倫理学的見解は、倫理的判断が認識としては成立しない (非認識説, non-cognitivism) との立場を採ることが大きく隔たる。従って、研究内容そのものも、前二者が規範的研究であるのに対し、後者のメタ倫理学的研究は、規範的研究というよりも、むしろ人工言語や日常言語を用いた論

理学的意味論の色彩が強いと考えられる。

以下の表は、英米倫理学における主要倫理学的アプローチの直覚主義、相対主義、功利主義、プラグマティズム、情緒主義、日常言語学派の主張から、倫理的原則の設定に関する必要

事項を中心にまとめたものである。しかし、この表はあくまで、スポーツの倫理学的研究に必要と思われる主要倫理学的アプローチだけを示したものであることを付言しておく。

それぞれの学派は、その立論の論拠の正当性

表. 英米倫理学における主要倫理学的アプローチの検討

倫理学的 アプローチ	「善」に関する 前提条件	事実と価値 との関係	倫理的原則の 設定方法	批判点	主唱者 主要文献
I 直 覚 主 義 (intuitionism)	<ul style="list-style-type: none"> : 善という言葉は定義できない。 : 善は事物の価値的性質を表わす言葉であり、善を知るには直覚以外に頼る方法はない。 : 善は手段的善ではなく、それ自身において善なるもののみが善である。 : 善は非自然的性質である。 	<ul style="list-style-type: none"> : 価値判断は事実判断から導出できない。 : 倫理的判断は経験的観察、形而上学的推理によって正当化できない。 : 自然主義・形而上学的倫理学には naturalistic fallacy が存在する。 	<ul style="list-style-type: none"> : あらゆる倫理的原則は直覚によってのみ知ることができる。 : 善の概念の分析は不可能。従って、最終的な倫理的原則は直覚的に捉える外はない。 : それ自身において善なるものの実現に対して有用な行為が正しい行為である。 	<ul style="list-style-type: none"> : 自己の直覚の客観的正当性を検証できない。 : それぞれの直覚の正当性を主張する限りにおいて相対的。 	<ul style="list-style-type: none"> : G. E. Moore (Principia Ethica) : D. Ross : A. C. Ewing : N. Hartmann
II 相 対 主 義 (relativism)	<ul style="list-style-type: none"> : 善と悪、正義と不正は相対的である。 : 「善」「悪」「正」「邪」は状況や文化によって変化する。 	<ul style="list-style-type: none"> : 価値判断は事実判断から導出できる。 : 価値判断はその時々、事実判断によって相対的に変化する。 	<ul style="list-style-type: none"> : 倫理的原則は外部からの影響、直観、その人自身の良心、経験等によって設定されるが、相対的である。 : 倫理的原則は人々や社会が異なれば変化する。 : 全ての状況が特殊性をもっているもので普遍的な倫理的原則などは存在しない。 	<ul style="list-style-type: none"> : 倫理的判断における相違と倫理的原則における相違は明確に区別されるべきであり、倫理的判断における相違から直ちに客観的な倫理的原則の存在を否定することはできない。 	<ul style="list-style-type: none"> : 文化人類学、社会学、心理学、歴史学等の記述的・経験科学により主唱
III 功 利 主 義 (utilitarianism)	<ul style="list-style-type: none"> : 善は経験的事実によって定義可能である。 : 善は快楽、もしくは幸福である。 	<ul style="list-style-type: none"> : 価値判断は事実判断から導出できる。 	<ul style="list-style-type: none"> : 倫理的原則は直覚によってではなく、行為の諸結果の快楽、もしくは幸福の総量で決定される。 : ある行為の正しさは、最大の一般的善を促進するか否かによって決定される。 	<ul style="list-style-type: none"> : 人間存在を快苦の感情で説明することはできない。 : 善の本性は快ではなく、快は善の結果としてそれに伴うものである。 	<ul style="list-style-type: none"> : J. Bentham (introduction to the principles of morals and legislation) : J. S. Mill (utilitarianism)

表. 英米倫理学における主要倫理的アプローチの検討 (つづき)

IV プラグマティズム (pragmatism)	: 善は経験的事実によって定義可能である. : 善は状況に即した有用性 (utility) である.	: 価値判断と事実判断には本質的相違はない. 従って, 価値判断は事実判断から導出できる.	: 倫理的原則は有用性 (utility) に関する経験的, 科学的な検証によって設定される.	: 価値判断と事実判断の連続性の検証ができない. : 目的善と手段善の混同がある.	: J. Dewey (Reconstruction in philosophy) : R. B. Perry : C. I. Lewis
V 情緒主義 (emotionalism)	: 善に関する倫理的判断は真偽を問うことができず, それは主観的感情の表明でしかない. : 倫理は科学的であり得ない. : 善という言葉は定義しにくい.	: 価値判断は事実判断から導出できない. : 価値に関する陳述は事実に基づく陳述と区別されねばならない.	: 倫理的原則についての倫理的判断が検証され得ない以上, 倫理的原則は相対的なものである. : 倫理学の目的は倫理的原則を設定することではなく, 倫理学的用語がもっている曖昧性を取り除きこれを科学的分析に耐え得る命題に翻訳していくことだけである.	: 倫理的判断に客観性を与え得ず相対的. : 倫理の問題に対する傍観的態度.	: C. L. Stevenson (Ethics and language) : A. J. Ayer (Language, truth and logic)
VI 日常言語学派 (ordinary language school)	: 善に関する倫理的判断は, 一定の範囲内において, 理由づけによってなされることができるともかもしれない.	: 価値判断は事実判断から導出できない.	: 倫理的原則は一定の範囲内において, 客観的な倫理的理 由づけによって設定される. : 究極的な倫理的原則は, 直覚によって決定されなければならない. : 倫理学の目的は倫理的判断に対する理由づけがいかなる場合に正しいか, またその限界がどこにあるかを探究することである.	: 究極的な倫理的原則は各人の主観の表明でしかなく, 客観性を与え得ず相対的.	: R. M. Hare (The language of morals) : S. Toulmin (The place of reason in ethics) : G. Ryle : J. Wisdom

(注: 本表の作成にあたっては, 表中に掲げた文献及び本稿において用いた文献を参照した.)

を主張しようとするれば, 例えば直覚主義, メタ倫理学は, 最終的には相対主義に限りなく近づかざるを得なくなったり, あるいはプラグマティズムの立場に立つルイス (C. I. Lewis) が試みたように³⁷⁾, 最終的には事実判断から価値判断の導出を諦め, 「理性」を直覚的に倫理的原

則として指定することによって倫理的問題を解明する方向に向かうことになる. この場合は, 極めてカント的な意味での義務論に近くなると言える. また, メタ倫理学的研究のように規範的研究を放棄し, 道徳言語の分析を専ら行うことになる. このように現在の倫理学の学派は,

それぞれの方法論の正当性を主張しようとすれば、いわゆる循環論証³⁸⁾に陥る。このような現状から一定の決着を見出すことは難しい状況にあると考えられる。

4. スポーツ倫理学の研究方法論

4.1 一般倫理学から示唆される研究方法論

以上のような一般倫理学の方法論をめぐる論争状況は、当然のことながら、スポーツの倫理学的研究の方法論にも直接影響を与えている。そのため少なくとも、上述の一般倫理学の方法論の論争状況を勘案すれば、スポーツの倫理学的研究の方法論も、以下のどれかの立場を採らざるを得なくなる。

- ①一般倫理学の方法論上の論争状況とは関わりなく、従来までの「スポーツマンシップ」や「フェアプレイの精神」といった道徳的原則を前提にして、問題状況の解決を試みようとする立場。
- ②一般倫理学の方法論上の論争状況とは関わりなく、先にみた「スポーツの無価値論」を進め、人間存在とスポーツの相互関係から倫理を捨象して研究する立場。
- ③一般倫理学の方法論上の論争状況とは関わりなく、恣意的に、ある1つの倫理学学派に立脚し、倫理的原則を設定して研究する立場。
- ④一般倫理学の方法論上の論争状況とは関わりなく、1970年代以降のスポーツの倫理学的研究に多く見られるように、恣意的に、自らの研究の仮説に適合する倫理的原則を引き出して研究する立場。
- ⑤一般倫理学の方法論上の論争状況を熟知した上で、事前にある一定の見解に立つこ

とを明確にし、それに従って倫理的原則を設定して研究する立場。

- ⑥一般倫理学の方法論上の論争状況を熟知した上で、それぞれの方法論の有効性と限界を明確にし、それぞれの方法論の論理的整合性を無視しない範囲で、応用領域としてのスポーツに適った倫理的原則を設定し、それに則り研究する立場。

少なくとも、スポーツ倫理の研究を「学」として志向しようとするれば、⑤ないし⑥の立場で研究を進めることが必要と考えられる。そのため、広義には、前述したスポーツの人格陶冶をめぐる一連の研究もスポーツ倫理の研究に含まれるが、厳密な意味では、スポーツのメタ倫理学的研究と規範倫理学的研究が主たる研究になるであろう。

これまでのスポーツ倫理の研究の中で、上記の⑤ないし⑥の立場にあると思われる研究を検討すると、上記で検討した厳密な意味での研究のうち、メタ倫理学的研究の代表例には、マッキントッシュ（P. McIntosh）の「Fair play」³⁹⁾、もう1つの研究である規範倫理学的研究として、フレイリーの「Right actions in sport」⁴⁰⁾が挙げられる。

4.2 マッキントッシュの方法論とその問題点

メタ倫理学は道徳言語の分析を行う領域であるが、マッキントッシュは「フェアプレイ」という、言わばスポーツ界における道徳言語を分析している。彼の接近方法は、上述の著書の第5章、第6章、第7章、第8章の中から読み取ることができる。

まず、第5章（Fair play : Give me a reason）においては、道徳的判断についての直観論者（intuitionist）の諸理論が検討されている。具体的には、「フェアプレイとは何なのかをどのように知ることができるのか」あるいは「何故、フェアにプレイする道徳的責務がある

のか」という問いに、直観論者らがどのように回答するかが考察されている。ここでは、「事実 (is) 言明と規範 (ought) 言明との区別」「社会契約から生じる責務」「普遍化可能性 (universalizability) の原理」「善や他の道德言語の意味」「対立責務の解決」といった倫理学的問題を、スポーツ領域の事例でもって明確にしようと試みている。彼の分析からは、フェアプレイは我々が直観によって道德的に善であると知っているものではなく、フェアプレイの道德性を正当化するには別の倫理学理論に目を向けなければならないという結果となり、第6章へと引き継がれていく。

第6章 (Fair play : Give me another reason) においては、メタ倫理学的問題の検討を功利主義の観点で分析し、さらに、無道德者 (amoralist) の理論および相対主義者 (relativist) の理論分析が行われている。功利主義理論に対しては、行為結果の善し悪しの基準、幸福とは何か、倫理的考察を自然言語に還元することへの懸念が指摘され、結論的に、フェアプレイの完全且つ十分な説明に功利主義、特に規則功利主義を適用するには困難が伴うとする。また、無道德者の理論である「スポーツにおいてすべきことは存在するのか」という問いに対して、彼は「例えば、同情・思いやりといった本質的、恒久的態度を人々が捨て去る事自体、人間存続、スポーツの存続に対しての危険な考えである」と結論づける。さらに、相対主義に対しては、ローマの剣闘士の試合やアパルトヘイトの事例を使用し、相対主義では価値判断ができないと結論づけている。

第7章 (What do you mean : Fair play ?) では、エイヤー、スチーブンスン、ヘアの理論が検討されている。エイヤーは論理実証主義を倫理学に適用し、初期の情緒主義理論を極端な形で展開した人物で、彼の主張を要約すれば、道德言明は本来の意味での言明ではなく、命令や叫びであるとする。また、スチーブンスンとヘアはエイヤーの狭隘さを超えて、道

徳言明の機能や役割の分析に進んだ人物である。スチーブンスンは、情緒主義者に位置付けられているが、マッキントッシュは彼の主張を休業補償 (broken time payment) と人種差別政策を例に挙げて説明している。しかしながら、スチーブンスンが、結局のところ “good” の定義の困難さを指摘するため、議論の進展はないままに終わっている。次に、ヘアの主張が検討される。ヘアは自然主義、直観主義、情緒主義という伝統的な3つの立場に加えて、指図主義という立場を打ち出した人物である。塩野谷によると⁴⁰⁾、ヘアの道德的推論における3つの重要な論点は、(1) 道德判断は指図性 (prescriptivity) を有すること、(2) 普遍化可能性を有すること、(3) 道德判断は論理的関係が存在することであるという。マッキントッシュは、ヘアの記述の意味と評価の意味の区別を援用して「フェアプレイ宣言」を分析し、「フェアプレイなくしてスポーツはスポーツたりえない」という宣言は、もともと記述の意味で使用されているのであって、評価の意味では使用されていないと指摘している。

第8章 (Fair play : A postscript, a declaration and a critique) では、道德言語の使用と道德的判断の機能について明晰化が引き続いて検討されている。彼は、賢明な判断と道德的判断との区別が、「善いもの」と「義務的なもの」との差異であるとし、この両者の差異によって、フェアプレイの倫理が二種類の言明から構成されると述べる。一方の言明は、フェアプレイのために行う義務のあるもの、他方は、義務では無いにしても推奨されるべき言明である。具体的には「フェアプレイ宣言」を引き合いに出して、前者の義務的な言明には、厳密なルール遵守と審判への絶対服従があり、後者の推奨されるべき言明としては、謙虚さ、礼儀正しさ、寛大さといったものがあるとしている。そしてさらには、前者が要請する厳密なルール遵守はそれを実行することが難しいため、競技団体には、別のルールを設定し、選手

の違反行為を阻止、もしくは予防することが必要で、ルールの遵守者だけが真の勝利者となることを保証すべきという指摘もなされている。

以上のように、マッキントッシュのメタ倫理学的アプローチは、他の方法論にはない特色を持っているのであるが、当然ながら問題点もある。フレイリーが指摘するように⁴²⁾、第1に、類似語が緻密に区別されて使用されていない点がある。例えば、暴力的行為を事例に挙げる場合、“violence”、“aggression”、“aggressive”といった言葉に混乱が見られ、分析の明晰化を難しくしている。第2に、マッキントッシュが当初意図した、スポーツ倫理の分析を教育理論・実践と結合させるという目的が果たされていない。その理由には、メタ倫理学の基礎知識がないとよく理解できないこと、また、個々の具体事例だけでは、明確にすべき全体の枠組みが見えてこないことが挙げられる。このような問題点があっても、スポーツ倫理学の研究方法論の観点からみて、メタ倫理学的アプローチの代表的な研究と言えるであろう。

次に、メタ倫理学的アプローチとは別の方法として、フレイリーの規範倫理学的なアプローチの検討に移ることにする。

4.3 フレイリーの方法論とその問題点

フレイリーは、スポーツ倫理学における規範倫理学的なアプローチによって、1つの研究方法の枠組みを提供している。彼の著書から全体構造を概説すれば、まずスポーツ場面に生じている倫理的問題状況の諸事例を紹介し、問題解決には自己利益的観点や慣習的観点ではなく、道徳的観点から解決の糸口を見いだすことが重要であると指摘する。彼はバイヤー（K. Baier）に倣って⁴³⁾、道徳的観点を本質的特徴と手続き的特徴から措定する。すなわち、道徳的観点の本質的特徴として「全ての人のため」「各人に等しく善」の2つと、手続き的特徴として「利害対立の解決」「原則に基づく行為」の2つを挙げる。次に、スポーツの試合場面に

おける原則を道徳的観点から導出する方法を、ロールズ（J. Rawls）が提示した「理性的契約者」⁴⁴⁾という理論仮説に求め、無知のヴェールの背後に立つ仮想的立場から、試合の「道徳的均衡状態」を形成し、維持し、あるいは「道徳的不均衡状態」を復元するための行為原則を創出し、原則間の優先性についても言及している。さらに、理由論的接近方法を「大差の試合」に適用して、スポーツの試合における最善の行為選択の方法論を提示している。また、別の視点で全体構造を見れば、彼自身が考える「よい試合」を描写して、1つの理想像を前提とし、そこに含まれる諸要素（試合における目的、勝敗とプレイ、ルールとその機能、対戦相手同志の関係、試合と価値）を分析して、各要素における規範的意味をプレイヤーの道徳的観点の本質的特徴からも判定している。この視点から見ると、彼は、各要素の規範的意味をスポーツ参加者に理解させ、よい試合の規範理論について、知的側面から援助しようとしていると言えるであろう。

フレイリーの研究は、よい試合の形成に必要な行為原則を導出する方法論を、一般倫理学の方法論に依拠しながら展開していることが認められる。但し、問題点がないわけではない。第1に、行為原則を導出する際の基準としている「全ての人のため」「各人に等しく善」という道徳的観点の本質的特徴が、なぜ設定されるのかという点である。それに関する論拠について、フレイリーは「これらの議論は、やっかいで複雑であるし、この研究で参照された幾つかの文献の中で十分に提示されている」し、「ここでは道徳的観点についての議論に焦点があるのではない」と述べ⁴⁵⁾、詳細な検討を回避している。この点に関する問題点は、彼が依拠したバイヤーの主張とその問題点がそのまま当てはまるし、フレイリー自身の研究の限界、問題点にもなっている。以下、この点について検討することにする。

1950年代から60年代に活躍したバイヤーは

「道徳的観点」という言葉を有名にした人物である。彼は、道徳的推論を2段階に区別している。第1の段階では、ある事実がいかなる理由に基づいて道徳判断を導くかを示し、そこでは、事実から当為を直接導いているのではなく、三段論法的に、小前提に「理由づけのルール」を介入させている。例えば、約束違反の行為(事実)には、反対すべき理由(理由づけのルール)があって、約束違反をすべきではない(当為)という推論が行われるのである。第2の段階では、理由づけのルールにも優先性があり、ここに「道徳的観点」を導入して道徳的理由づけのルールを最優先とするのである⁴⁶⁾。フレイリーの場合は、このパイヤーの思考枠組みを援用し、道徳的観点の他に、自己利益的理由づけと慣習的理由づけを引き合いに出して、道徳的理由づけを最優先している。しかしながら、複数の選択肢のうちで、どれもが道徳的理由に基づく場合、どの行為を優先すべきかの問題は不明で、そこにパイヤーの方法論の重大な問題点となっている。

そのためフレイリーは、複数の選択肢に道徳的理由が存在する場合の判定として、2つの判定方法、算術的方法と負の功利主義とよばれる判定方法を採っている⁴⁷⁾。前者は、道徳的理由、慣習的理由、自己利益的理由の各々に重要度の差を設け、算術的方法で判定しようとする。例えば、行為に賛成する理由の場合、道徳的理由(+2)、慣習的理由(+1)、自己利益的理由(+1)とし、逆に行為に反対する場合、道徳的理由(-2)、慣習的理由(-1)、自己利益的理由(-1)とする。この方法でも問題点は残る。①一般的には多くの道徳的理由が存在すれば最善の行為である可能性は高いのであるが、行為理由を挙げる参加者自身の能力に、理由の列挙は依存する。②3つの理由に重要度の配点は(+2, -2), (+1, -1)で適正なのか。③道徳的理由が同数の場合、慣習的理由や自己利益的理由の寡多でもって判定してよいのか、といった問題がある。

また、後者の判定方法は、簡略化して述べれば、第1位に推奨される選択は最も支持のあるもの、第2位は複数の選択肢で同程度の支持であればどの行為でも良い、第3位は、反対理由しかなければ別の選択肢を見いだすか、それとも被害が最小限のものを選択するというものである。この判定方法は、利害対立を調整する役割が道徳の機能であるという、言わば規範的道徳原理を判定基準に潜ませたものである。判定基準それ自体に主観的規範が入り混んでいるし、上述した相対立した選択肢のいずれもが道徳的理由があれば、後者の判定方法では最善の行為は選択できないであろう。

以上のような問題点はあるとは言え、スポーツ倫理学における規範倫理学的方法論を用いた1つのモデルを提示している点では高く評価できるであろう。また、「理由論的接近」という道徳的推論の方法は、スポーツ倫理の教育方法として応用可能と考えられる。例えば、試合場面における意図的反則行為、審判の判定ミスへの対処方法⁴⁸⁾、大差の試合への対処方法⁴⁹⁾、等々の問題に道徳的理由を提示しながら、たとえ最善の行為選択の決定に至らなくとも、その解決過程における熟省は有効な教育方法の1つとなる可能性が示唆されるのである。

スポーツ倫理学の研究の中で、明確な方法論意識をもった2つの研究、すなわち、メタ倫理学のアプローチのマッキントッシュの研究、規範倫理学のアプローチのフレイリーの研究を検討してきた。両者とも問題点はあるが、「学」としてのスポーツ倫理学を意図した貴重な研究であることは確かである。両研究ともさらなる分析、発展が必要であるが、現在の段階では代表的事例として挙げられよう。

5. まとめと今後の課題

以上の議論をまとめると、従来までのスポーツ界における倫理的問題状況への解決方法は、観念的な自己世界観を当該現象に適用したり、

実践的時事問題の論評といった形で行われてきたと言える。この点は、方法論的意識が高まる1970年代以降においても少なからず見られる傾向である。しかしながら、このような方法論では、観念の虚構に陥ったり普遍化できる解決や真偽の検証は不可能であろう。この暗中模索状態を打破するには、反省的思考に基づいて従来までの接近方法を見直す必要があると考えられる。具体的には、①現実を十分に分析しないで観念的な世界観の形成に耽ることをやめること、②理論的枠組みを持たないで近視眼的な実践への対応に終始することをやめることである。以上の事柄を念頭に置き、スポーツ界の秩序を発見すべきと考えられる。

一般倫理学における研究方法論に確固たる同意がない以上、個々の倫理学アプローチの有効性と限界を認識することがスポーツ倫理学研究にとっての第一段階となろう。その検討を経た上で、スポーツ現象の解明に、どのアプローチが有効であるかを検証していくことが必要となろう。本研究では、一般倫理学のアプローチの内、メタ倫理的なものや規範倫理的なものとを取り上げ、その研究の概略と問題点を検討したのであるが、別の方法論を用いての分析が今後の課題となるであろう。

スポーツ倫理の研究は、結論の普遍性や再現性といった点において、他の諸科学から非科学的という批判を受けがちである。しかし、アリストテレスが「主題の本質から外れない限り、物事それぞれの段階においての正確性を追求すべきである。数学者から不確かな推論を受け入れることや、修辞学者に科学的証明を求めたりするのは、明らかに馬鹿げている」⁵⁰⁾と語るように、科学的証明方法とは別の、あたかも司法学者が行うような緻密な論理展開でもって、問題事象を探究していくことが重要と考えられる。

注

1) White, A. (1982). Soccer hooliganism

in Britain. *Quest*. 34 (2) : 154-64.

2) 薬物ドーピングを倫理的に検討した論文には、近藤良享(1990). 薬物ドーピング禁止規定に関する一考察. *スポーツ教育学研究*. 10 (1) : 1-11., 近藤良享(1991). 「スポーツと薬物」をめぐる問題: 長期的共通善への視点. *いばらき体育・スポーツ科学*. 6 : 1-13. がある。

3) 非合法的な従来のアナボリックステロイド(筋肉増強剤)等を使用する代わりに、合法的手段として人工受精で妊娠し、妊娠初期のホルモンの分泌を促すことによってパワーの増強を図る新手のドーピングが登場し、問題化しつつある。この中絶ドーピングはソウル五輪を前に、東側諸国の女子陸上トップ選手の間でかなりの勢いで広がっていると英紙「サンデー・ミラー」で報じられた(参考: 朝日新聞, 朝刊, 変ぼうする五輪(2), 1988年6月23日付)。

4) Morgan, W. J., Meier, K. V. (Eds.).(1988). *Philosophic inquiry in sport. Human Kinetics*, ix.

5) 後述するが、行為の倫理的原則を確定する倫理学の方法論は幾つかに分類され、それらは各々の正当性を証明するために古くから論争が繰り広げられてきた。そのため行為における善悪、正邪、価値を規定する倫理学の方法論は、未だ結論には至っていない。さらに、倫理の問題は世界観の問題で主観的であり、客観性を要求すべきではないし、主観的という根拠に倫理学は学問たり得ないという批判的見解も伝統的に存在している。(参考: 岩崎武雄(1964). 英米哲学の概観と印象. 民主教育協会, p. 62.)

6) 本稿で用いる方法論とは、スポーツにおける行為の適法性を判定する基準となる原則に到る筋道の根拠を意味している。(参考: 浜井 修(1986). 社会哲学の現在: ウェーバー以後の展開. 大森荘蔵他(編). 新・岩波講座哲学 11 社会と歴史. 岩波書店, p. 3.)

7) 馬場哲雄, 石川悦子. (1978). スポーツ倫理の倫理学的研究: その動向と比較研究. 日本女

- 子大学紀要文学部, 28 : 69-77.
- 8) Krechmar, S. (1984). Ethics and sport : An overview. *Journal of the Philosophy of Sport*, 10 : 21-32.
- 9) Meier, K. V. (1985). Axiological issues and sport. *Journal of the Philosophy of Sport*, 11 : 1-5.
- 10) 道德外の価値の判断では, 行為, 人間, 動機などではなく, むしろそれ以外のあらゆる種類のものへすなわち, 自動車, 絵画, 経験, 政治形態等々のものを評価する. (参考: フランケナ (1975). 杖下隆英訳. 倫理学, 改訂版, p.17.)
- 11) 従来のスポーツの倫理的研究の幾つかにみられるように, 無前提にスポーツの倫理的側面を賛美した方法論上の根拠を欠いた研究は, この見解の範疇に含まれると考えられる.
- 12) Coakley, J. J. (1978). *Sport in society : Issues and controversies*. St. Louis : Mosby.
- 13) Yeager, R. C. (1977). *Savagery on the playing field*. *Reader's Digest* pp. 23-31.
- 14) この種の論争は, 主にスポーツ社会学やスポーツ心理学で行われてきたものである. スポーツの人格陶冶に関する論議については, 以下の文献を参照されたい.
- Tutoco, T., & Bruns, W. (1976). *Winning is everything and American myths*. New York : Macmillan pp. 38-45.
 - Delattre, E. J. (1975). Some reflections on success and failure in competitive athletics. *Journal of the Philosophy of Sport* II : 133-39.
- 15) Locke, L. F. (1973). Are sports education ? . *Quest* 19 : 87-90.
- 16) 松尾文夫. (1988). 一九六八年. 文芸春秋, 6月号, p. 87.
- 17) 以下の文献が挙げられる.
- Etzioni, A. (1976). Do as I say, not as I do. *The New York Times Magazine*, September 26.
 - Chace, J. (1977). How "moral" can we get? . *The New York Times Magazine*, May 22.
 - Hazard, G. C. (1978). Capitalist ethics. *Yale Alumni Magazine & Journal*, 41 (8) .
- 18) The growing dishonesty in sports : Is it just a reflection of our American society? . *The New York Times (Sports Section)*, November 7, 1976, p. 10.
- 19) 倫理学史の評価に関しては諸説みられるが, そのどれもが1930年以降主流であったメタ倫理学的研究から, 1970年代を境にその成果を基盤とした規範的研究に学的対象が移行したことに関しては, ほぼ一致した見解をとっている. 例えば, 山内友三郎 (編) (1983). *西洋倫理学史*. 学術図書出版社. を参照されたい. また, 現在の米国の倫理学的研究動向も, ほぼその流れをくみながら, メタ倫理学に批判的立場をとりつつも規範倫理学の観点から, 功利主義とメタ倫理学の成果の融合の試みがなされようとしている. 詳しくは, Fumerton, R. A. (1989). *Reason and morality : A defence of the egocentric perspective*. Itaca : Cornell UP. あるいは, Hardin, R. (1988). *Morality within the limits of reason*. Chicago : University of Chicago Press, を参照されたい.
- 20) この時期にスポーツの倫理的逸脱状況が盛んにテレビ, 一般雑誌, 新聞に取り上げられ, 社会の注目を集めるようになる. 詳しくは, Baker, R. (1976). *Good bad sports*. *The New York Times Magazine*, Feb. 1, あるいは, Miller, D. M. (1980). *Ethics in sport : Paradoxes, perplexities, and a proposal*, *Quest* 32 (1) : 3-7. また, 前掲の13, 18) の文献も参照されたい.
- 21) Grupe, O. (1985). The problem of doping or the influence of pharmaceuticals on performance in sports from the standpoint of sports ethics. *Snipes Journal* 8 (1) : 53-54.
- 22) Fraleigh, W. P. (1984). Right actions

- in sport : Ethics for contestants, Human Kinetics, p. 5. (フレイリー, 近藤良享他訳. (1989). スポーツモラル, 不昧堂出版, p. 18.)
- 23) Perry, C. (1988). Blood doping and athletic competition. Morgan, W. J. Meier, K. V. (Eds.). (Philosophic Inquiry in Sport, Human Kinetics pp. 308-09.
- 24) *ibid.* 21) p. 53.
- 25) *ibid.* 22) p. 5. (邦訳, p. 18.)
- 26) 一般に倫理的評価を下す際の医学的原則は、人間尊重(生命・身体・人格の尊重)の道德原理を含むものであるが、ここでは適用する原則によって倫理的評価が異なることを例証するために、あえて薬害のみに限定した医学的原則を適用している。このような薬害のみに限定した医学的原則から導出される行為原則は、薬剤の使用によってもたらされるパフォーマンスの向上による道義上の倫理的評価(競技の公正や機会均等の保証)によって導出される行為原則と矛盾する。(参考: コールバーグ(1987), 岩佐信道訳. 道德性の発達と道德教育, 広池学園出版部 pp. 3-57.)
- 27) 本稿でいう倫理的原則は、前述したように行為の適法性を判定するための基準であり、後に見るフレイリーの研究に示される行為原則とは明確に区別される必要がある。また、行為原則との関連で倫理的原則を述べれば、この原則は、スポーツにおける具体的な行為原則を導出するための基準となるものである。
- 28) Simon, R. L. (1985). Sports and social values, Englewood Cliffs, NJ : Prentice Hall, p. 3.
- 29) 英米圏の哲学研究はその対象であれ、方法論であれ、旧大陸とは異なった独自の立場を確立しており、米国の哲学界は他の言語文化圏の哲学研究に多くの関心を示していないように思われる。この傾向は、一般に米国の倫理学研究にも当てはまり、その研究内容は英米の倫理學理論が中心である。また、他の言語文化圏の哲学研究に多くの関心を示さない理由として、一般の米国人の教授・学生の語学力の欠如を指摘する声もある。(参考: 笹田豪史郎. アメリカにおけるカント研究の現状. 理想, No. 644, p. 100.) さらに、米国におけるスポーツの倫理学的研究が、倫理学研究の研究内容に規定され、英米の倫理學理論を中心に扱っているため、ここでは英米の倫理學理論のみを対象として考察を進める。
- 30) 英米倫理学において、どのような方法論を主要なものとするかについては、概ねここで取り上げたもので妥当であろうと思われる。それは、岩崎が英米倫理学の主要な方法論として、直覚主義、自然主義、非認識説の倫理學説を考えていることから明らかである。また、ホスパースも主要な方法論として、倫理的非自然主義(ethical non-naturalism)、倫理的自然主義(ethical naturalism)、情緒主義(emotivism)があることを述べている。(参考: 岩崎武雄(1984). 現代英米の倫理学. 勁草書房, 及びHospers, J.(1953). An introduction to philosophical analysis. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall p. 484.)
- 31) 弘 睦夫(1979). 当為, 金子武蔵(編). 新倫理學事典, 弘文堂, p. 307.
- 32) Frankena, W. K. (1973). Ethics.(2nd ed.) Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall p. 14. (フランケナ(1975), 杖下隆英訳. 倫理學改訂版, p. 23)
- 33) *ibid.* 32) p. 4. (邦訳, p. 7.)
- 34) 前掲31) p. 308.
- 35) *ibid.* 32) p. 15. (邦訳, pp. 24-25.)
- 36) *ibid.* 32) pp. 4-5 (邦訳, pp. 7-8.)
- 37) 岩崎武雄(1984). 現代英米の倫理学, 勁草書房 pp. 187-95.
- 38) 循環論証とは、Aを論証するための論拠として用いられるBが、Aを論拠としなければ論証できない場合をいう。循環論証は論理上の虚偽のひとつである。(参考: 栗田賢三・古在由重(編)(1979). 岩波哲学小辞典. 岩波書店, p. 110.)
- 39) McIntosh, P. (1979). Fair play : Ethics

- in sport and education, Heinemann,
(邦訳, 水野忠文 (1983), フェアプレイ,
ベースボールマガジン社)
- 40) *ibid.* 22)
- 41) 塩野谷祐一 (1984) 価値理念の構造: 効用対
権利. 東洋経済新報社, p. 68.
- 42) Fraleigh, W. P. (1980). Review essay,
Journal of The Philosophy of Sport, VII,
pp. 65-76.
- 43) Baier, K. (1958). The moral point of
view: A rational basis of ethics, Cornell
University Press, pp. 187-207.
- 44) 理性的契約者という概念については, Rawls,
J. (1971). *A theory of justice*, Harvard
University Press, (邦訳: 矢島鈞次監訳
(1979). 正義論. 紀伊国屋書店) 及び, ロール
ズ, 田中成明編訳 (1979). 公正としての正義,
木鐸社を参照のこと.
- 45) *ibid.* 22) p. 17. (邦訳, p. 31.)
- 46) 前掲書 41) pp. 65-66.
- 47) Fraleigh, W. P. (1988). Analysis of
reasons for action: One method for
decision on the morally best action,
AAHPERD Convention, Unpublished Paper.
- 48) 近藤良享, 島崎直樹 (1989). W. P. フレイ
リーの「最善の行為を選択する方法論」に関す
る研究. 体育・スポーツ哲学研究, 11(2). 93-102.
- 49) *ibid.* 22) pp. 180-190. (邦訳, pp. 214-
226.)
- 50) アリストテレス, 高田三郎 (訳) (1971).
ニコマコス倫理学, 岩波書店, pp. 18-19.

1991年11月5日採録